

キリスト教に於けるホスピタリティ精神

The Sprit of Hospitality in Christianity

大津 ゆり

OTSU Yuri

The term “hospitality” has become extremely popular these days. Hospitality is considered important in the tourist industry as it increases customer satisfaction and promotes sales performance.

But just what is “hospitality”? Before we go on using the word casually without fully grasping its meaning, it is fitting to look once again at its roots in Christian and Western thought and in the human spirit itself.

By inquiring into the origins of the spirit of hospitality, our discussion necessarily leads us to the parable of the Good Samaritan, for is it not he, who rendered aid to the wayfarer in need without hesitation or thought of personal gain, the one who should be considered the prototype the incarnation of hospitality?

1 . はじめに

「ホスピタリティ」という言葉は、ホテル、エアラインをはじめとする観光業界では「もてなし」として捉え、顧客満足を得て販売実績を伸ばすことに繋がるよう、従業員教育のキーワードにしているところも多い。日本語の辞書で「ホスピタリティ」という言葉を収録しているものはわずかであるが、そのほとんどが、「客、訪問者、旅行者へのもてなし、歓待」¹とある。これは「ホスピタリティ」が外来語であり、英語の辞書を訳したからであろう。

The Oxford English Dictionary (Clarendon Press, 2nd Edition 1989) では、“hospitality”の説明の冒頭は次のように記載されている。“the act or practice of being

hospitable; the reception and entertainment of guests, visitors, or strangers, with liberality and good will.”

「客、訪問者、見知らぬ人に対して偏見なく、好意的に行われる歓迎ともてなしの行為と実践」が“hospitality”の語釈である。guest とは望まれて来る存在であり、日本語の客という語にふさわしいし、visitor は望まれずに来る場合もあり、訪問者という訳が当てはまるであろう。しかし、「ホスピタリティ」は、歓迎やもてなしだけの意味しかないのだろうか。

「ホテル」「ホスピタル」「ホスピス」「ホスピタリティ」は、同じラテン語のhospesを語源に持ち、hospesは「客と主人」の両方の意味をもっているが、客と主人という二重の意味を持つ背景に、ギリシャ語のxenos (ξενος クセノス) がある。クセノスとは、大学書林の『ギリシャ語辞典』(1989)²によると、「(個人についても国家についても)盟友の契りによって結ばれたもの。(この関係は、一代に留まらず、子孫にまで継承される。)

客人、(時に)主人 よそ者、外国人」などの意味を持ち、形容詞であるクセニコス「外国(人)の、傭兵の、普通でない、異様な 賓客をもてなす」、同じくクセニョス「賓客をもてなす、友愛の、盟友の契りで結ばれた 異国の」などを挙げている。

「クセノス」³とは、「よそ者」や「部外者」を表し、ギリシャ人、非ギリシャ人を問わず、自分の共同体の正規のメンバー以外を指す。「クセノス」は、外国人や友人ではなく、「儀礼化された賓客」、「精神上の親族」を意味した。また、「クセノス」を客人の守護神ゼウスの使いと信じて、旅人や異国の人を助けるゼウス・クセニウス⁴という制度もできた。ホメロスの『イーリアス』⁵に、祖先が歓待された相手には、後の時代に敵対関係になっても、代々それぞれの国において、主人として歓待しあうことを約束する場面があり、この友好関係をクセニア関係というが、この友好関係は特定の契約儀礼と返礼の義務をもつものであった。義務として歓待するということを、ホスピタリティであると呼べるであろうか。

「ホスピタリティ」とは、返礼や義務ではなく、自発的なものではないか。

しかし中世に入ってから、巡礼者に宿と食事を提供し、行き倒れの旅人を看護する施設をクセドキウム⁶と呼んでいることは、クセノスとホスピタリティの精神が密接な関連があることを示す一例であろう。

古代ギリシャおよびローマにおいて、それぞれ、ξενος, hospes の語に、客をもてなす際の「見返りを求めない自発的な行為」というニュアンスが含まれていることから、この「見返りを求めない自発的な行為」こそホスピタリティの精髓であり、「ホスピタリティ精神」

と呼ぶものと筆者は考える。クセノスの精神をさらに一步すすめたのが、キリスト教におけるホスピタリティの精神であろう。

ホスピタリティの概念は、ギリシャ・ローマ時代から現代までつづく西欧思想の根底に流れるキリスト教を抜きにしては論ずることができないであろう。本稿では、新約聖書の中に現れる「ホスピタリティ精神」を考察し、「ホスピタリティとは何か」という問いに答えるべくヒントを探してみたい。

2．聖書におけるホスピタリティ

キリスト教は、とりわけイエス・キリストの復活後は、「愛」の宗教と性格づけられる。キリスト教の修道女マザーテレサを、人は誰でも「無償の愛を実践した人」として思い出すであろう。この無償の愛こそ、ホスピタリティ精神の基本精神なのではないか。『旧約聖書』では、「愛」は大切な掟である。

「レビ記」19章18節においては、例えば旧約時代でも次のように記されている。

復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。

旧約における「隣人」⁷（ヘブライ語のレーア）とは、出生に基づいて結びついている同胞ではなく、交際している仲間を意味する。愛する対象は自分の同胞だけでなく隣人一般に及ぶものとされている。

『新約聖書』では、『旧約聖書』よりさらに愛の重要性が説かれている。

「コリントの使徒への手紙 1」13章1節から13節では、愛が信仰よりも希望よりも大切であると説かれている。

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。全財産を貧しい人のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身

を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、憎しみを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子を捨てた。わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

隣人への愛を尊ぶことの大切さを「マタイによる福音書」“離縁について教える”19章19節で知ることができる。

父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。

同じく22章“最も重要な掟”37節から39節では、律法家からの最も重要な掟は何かという問いに対し、イエスは次のように答えている。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。「隣人を自分のように愛しなさい。」

『マルコによる福音書』“最も重要な掟”12章31節にも、同じ場面が記されている。

第一の掟はこれである。「イスラエルよ、聞け。わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」第二の掟はこれである。「隣人を自分のように愛しなさい。」このふたつにまさる掟はほかにない。

これに続く 33 節では、イエスは隣人愛を神への捧げ物よりも尊いとしている。

「『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす捧げ物やいけにえよりも優れています。」

また、『ガラテアの信徒への手紙』“キリスト教の自由”5 章 13 節では次のように、隣人を愛することを律法全体を全うすることとしている。

兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。

さらに、イエスは、隣人のみならず敵をも愛せよと説いている。『マタイによる福音書』“敵を愛しなさい”5 章 44 節では、

敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だからあなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。

『ルカによる福音書』“敵を愛しなさい”6 章 27 節では、

しかしわたしの言葉を聴いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなた方を侮辱するもののために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬をも向けなさい。

以上のように、「愛」こそホスピタリティ精神の根底にあるのではなかろうか。ホスピタリティを「もてなし」と捉えてしまうと、そこには必ずしも「愛」は必要ではない。「もてなし」とは、教養、性格などによって培われた身のこなしや態度、ふるまい方、態度、待遇を意味するものであり、客に対して食事や贈り物を提供して相手を歓迎することにより、人間関係をより良く展開するための手段に使われることがしばしば起きるからである。「もてなし」を強要する賄賂的な社会的慣習すらあるので、「ホスピタリティ」という言葉を「もてなし」と説明することには疑問を投じておきたい。

次に、*NAVES Topical Bible*の“Hospitality”の項目⁸を見てみよう。『新約聖書』からは 11 箇所が挙げられているが、そこには検討の余地がある。

『マタイによる福音書』の 22 章「婚宴のたとえ」2 節～14 節

天の国は、ある王が王子のために婚宴を、催したのに似ている。王は家来たちを送り、婚宴に招いておいた人々を呼ばせたが、来ようとしなかった。そこでまた、次のように言って、別の家来たちを使いに出した。「招いておいた人々にこう言いなさい。『食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください。』」しかし、人々はそれを無視し、一人は畑に、一人は商売に出かけ、また、他の人々は王の家来を捕まえて乱暴し、殺してしまった。そこで、王は怒り、軍隊を送って、この人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。そして、家来たちに言った。「婚宴の用意はできているが、招いておいた人々は、ふさわしくなかった。だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れてきなさい。」そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めてきたので、婚宴は客でいっぱいになった。王は客を見ようと入って来ると、婚礼の服を着ていない者が一人いた。王は、「友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか。」と言った。この者が黙っていると、王は側近の者たちに言った。「この男の手足を縛って、外の暗闇にほうり出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。

この譬え話で、良い人も悪い人も、出会う人をみな集めたという個所をホスピタリティと解釈して引用したのであろうか。婚礼の礼服を着ていなかった人を会場から追放し、「招

かれる人は多いが、選ばれる人は少ない」と結んでいる個所には、ホスピタリティ精神を感じることができない。この説話をホスピタリティの例として挙げることに對しては疑問を感じる。

『マタイによる福音書』「すべての民族を裁く」25章34節～39節

そこで、王は右側にいる人たちに言う。「さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」すると、正しい人たちが王に答える。「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見て、お着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。」そこで、王は答える。「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」

最後の審判について書かれたここに登場する正しい人たちの行為こそ、ホスピタリティではないか。なぜなら、彼らは永遠の命を得るという目的のために、親切な行為を行ったわけではないからである。

新共同訳では「旅をしていたときに宿を貸し」と訳されているが、*New King James Version (NKJV)*や *Today's English Version (TEV)*では“I was a stranger, and ye took me in”(見知らぬ人であった私を暖かくもてなした)という表現をしており、strangerへの行為であることが強調されている。なお、ξενος「外国の、よその、無縁の」というのがギリシャ語の原文である。

『ルカによる福音書』の「客と招待する者への教訓」14章12節～14節

昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親戚も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかもしれないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の

不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。

ここでは招待の心得を説いており、返礼のできない人へのもてなしを勧めているこの行為も、ホスピタリティと言えるであろう。最終的には神から報われるのであろうが、この世においては見返りを求めない行為であり、ホスピタリティ精神と理解できる。

『ローマの信徒への手紙』「キリスト教的生活の規範」12 章 13 節

聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。

貧しい人を助け旅人をもてなすようにつとめることは、ホスピタリティ精神の表れであろう。ギリシャ語では φιλοξενία「旅人」という表現を使っている。また、*NKJV*では“given to hospitality”と訳しているが、*TEV*は、“Share your belongings with you needy”と分かち合いの重要性を強調した訳になっている。

『ローマの信徒への手紙』「個人的な挨拶」16 章の 2 節

どうか、聖なる者たちにふさわしく、また、主に結ばれている者らしく彼女を迎え入れ、あなたがたの助けを必要とするなら、どんなことでも助けてあげてください。彼女は多くの人々の援助者、特にわたしの援助者です。

姉妹フィベを紹介するにあたり、援助者であるから助けてあげてほしいというのでは、ホスピタリティ精神とは言えまい。援助者であろうとなかろうと、助けが必要な人に手をさしのべるのが、ホスピタリティであろう。従って、この個所をホスピタリティの例として挙げるのは不適切と思われる。

『テモテへの手紙 一』 「監督の資格」 3章2節

教会の監督となるべき人の資質が問題にされているが、以下のように客への親切なもてなしを条件の一つとしている。

「監督の職を求める人がいれば、その人は良い仕事を望んでいる。」だから、監督は、非のうちどころがなく、一人の妻の夫であり、節制し、分別があり、礼儀正しく、客を親切にもてなし、よく教えることができなければなりません。⁹

NKJVでは、「客を親切にもてなす」という箇所を hospitable と訳している。TEVでは、“he must welcome strangers in his home”と訳している。ギリシャ語原文では φιλόξενον 「旅人を親切にもてなす」となっている。

『テモテへの手紙 一』 「教会の人々に対して」 5章10節

教会の人々に対しての記述であり、やもめとして登録する条件を示している。

善い行いで評判の良い人でなければなりません。子供を育て上げたとか、旅人を親切にもてなしたとか、聖なる者たちの足を洗ったとか、苦しんでいる人々を助けたとか、あらゆる善い業に励んだものでなければなりません。

ここでも、旅人を親切にもてなすことが大切な善い行いの一つとされている。

『テトスへの手紙』 1章 「クレタでのテトスの仕事」 7節～8節

テモテの3章2節と内容は同じであり、教会の監督となる者の資質について書かれている。

監督は神から任命された監督者であるので、非難される点があってはならないのです。わがままでなく、すぐに怒らず、酒におぼれず、乱暴で

なく、恥すべき利益をむさぼらず、かえって、客を親切にもてなし、善を愛し、分別があり、正しく、清く、自分を制し

*NKJV*では“not greedy for money, but hospitable,”(金に貪欲ではなく人を暖かくもてなす)、*TEV*では“he must be hospitable and love what is good”(人を暖かくもてなし、良きことを好む)と hospitable(人を暖かくもてなす、親切にもてなす)という表現を使っている。ギリシャ語の原文には φιλόξενος「旅人」への親切なもてなしとされている。

ギリシャ語原文では旅人へ親切なもてなしを行うこととあるのを、英語国民は教会の監督になる者の資質として、さらに金銭へ無欲さや良い行いを行うことへとキリスト教的な愛の実践へと理解を深めているように思える。

『ヘブライ人への手紙』 13 章 「神に喜ばれる奉仕」 2 節

旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは、気づかずに天使たちをもてなしました。

旅人を親切にもてなすことが天使をもてなすことであると言っている。*NKJV*では“Do not forget to entertain strangers”(見知らぬ人を歓待することを忘れてはならない)、*TEV*では“to welcome strangers in your home”(見知らぬ人を家庭で歓迎する)という表現を使っており、見知らぬ人への親切な行為の大切さを説いている。

『ペトロの手紙 一』 4 章 「神の恵みの善い管理者」 9 節～11 節

不平を言わずにもてなし合いなさい。あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

いやいやではなく、互いに hospitality を行えという内容である。ホスピタリティにおける自発性の重要性をといた個所として注目される。

『ヨハネの手紙 三』 「善を行う者、悪を行う者」 5 節～8 節

愛する者よ、あなたは、兄弟たち、それも、よそから来た人々のために誠意を持って尽くしています。彼らは教会でああなたの愛を証しました。どうか、神が喜ばれるように、彼らを送り出してください。この人たちは、御名のために旅に出た人で、異邦人からは何ももらっていません。

宣教師を助けることについて、手紙の受け取り手に対して、「あなたは stranger であっても忠実に世話をしている。神のみ旨にかなうやり方で旅行に必要なものを彼らに与えて旅立たせくださるならありがたいことである。この人たちはイエスの名のもとに旅に出たもので、異邦人からは何も受けていない」と旅人への援助を依頼している。

*NAVES Topical Bible*の“Hospitality”の項目の新約聖書から選択された「ホスピタリティ」の例を検討してきたが、ホスピタリティ精神を最も適切に言い表している例は、 の『マタイによる福音書』25 章 34 節から 40 節の箇所であると思われる。ここに見られる「見知らぬ人への無償の自発的な行為」をさらに具体化したのが、『ルカによる福音書』の第 10 章に登場する「善きサマリア人」の譬え話¹⁰である。この譬え話こそホスピタリティ精神を最も表していると思えるので、*NAVES Topical Bible*に取り上げられなかったことを疑問に感じる。次に『ルカによる福音書』に見られる「善きサマリア人」の説話について検討しよう。

3．善きサマリア人とホスピタリティ精神

『ルカによる福音書』の 10 章 25 節から 29 節で、律法の専門家から、「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるか」と問われたイエスは、「律法には何と書いてあるか」と逆に問う。律法の専門家が、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの主である神を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさいと書いてあります」と答えると、イエスはそれを実行するように言われた。さらに律法の専門家から発せられた「隣人とは誰か」という質問に対して、イエスは次のような譬え話をした。

ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じようにレビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。」

この律法の専門家とイエスのやり取りに関してマンフレート・バンテル¹¹は、次のような解釈をしている。

「隣人は誰かという質問の正解は、『一人の信心深いユダヤ人だけが私の友人だ。』でなければならないが、イエスが『全ての苦しむ人が隣人だ。』と答えることを期待した律法家が、イエスをユダヤの律法にそむく者として追放しようとする罠であった」。

イエスは、パリサイ人の罠に陥ることなく、譬え話を語るにより、「隣人」の解釈を「ユダヤ人」から広い範囲へと広げたのである。

また、矢内原忠雄は『聖書講義 ルカ伝 上』¹²で、次のように述べている。「イエスは、律法の専門家として自他ともに認めるパリサイ人の口から律法を説明させ、律法解釈の定めた隣人という範囲を超える真理を示された。」

この譬え話にサマリア人を登場させた背景には、当時のユダヤ人とサマリア人の関係がある。

サマリア (Samaria) ¹³は、紀元前 880 年頃パレスチナ中央部、ユダヤとガリラヤの間の丘陵地帯にイスラエル王オムリにより建設された古代イスラエル王国の首都であったが、紀元前 722 年にアッシリアによって征服された。アッシリアは征服したサマリアの上層階級をアッシリアの各地に移し、他の地方の人々をサマリアに移すという一種の雑婚政策をとったため、サマリア人は混血となり、そのことによりユダヤ人から差別¹⁴されるようになった。

ローマ帝国の後ろ盾によりユダヤ王国ができると、ヘロデ王は紀元前 20 年代に、サマリアをローマ元首の尊称であり、ローマ帝国の都市名¹⁵として用いられているラテン語 Augusta のギリシャ語対応形、セバステと改称した。しかし、新約聖書の中ではこの名称

は使われていない。サマリアは新約聖書の時代には、ユダヤと同様にローマの直轄地となっていたが、サマリア人とユダヤ人とは、民族、宗教、生活習慣も異なっていた。

サマリア人は全能なる唯一の神を信ずる故に偶像を拒否する。ユダヤ人とは守り方の違いはあっても安息日を遵守し、割礼、シナゴグにおける宗教儀式を行い、モーセ五書を重視する。この点ではユダヤ教と共通しているが、決定的相違点は、モーセを唯一の預言者とし、他の預言者を認めないことである。彼らはモーセ五書だけを正典とみなし、エルサレムの神殿に対して、ゲリジム山上に神殿を奉じた。「メシア」でも「人の子」でもなく、「ターヘーブ」と呼ばれる「モーセのような予言者」の出現を待望していた¹⁶。そのため、紀元初頭のユダヤ人とサマリア人とは、きびしい論争を交わす敵対関係にあったが、さらに紀元後 6～9 年頃にサマリア人がエルサレムの神殿に人骨を撒き、聖域をいちじるしく汚した事件以後、彼らの関係は一層険悪になったと言われる¹⁷。

先の譬え話で、ユダヤ人にとって隣人とは程遠い存在であったサマリア人が、イエスにより「隣人」＝「助けを必要とする人に無償の自発的行為を行う人」と認められたこの話は、「汝の敵を愛せ」という教えを具体的に伝えるためであろう。

イエスに質問した律法の専門家も、この譬え話を聞く人も、共にユダヤ人であったであろう。当時のユダヤ人にとって「隣人」とは、同胞であるユダヤ人であった。しかし半殺しにあって道に倒れていたユダヤ人を、ユダヤ人社会の中で、地位が高く、尊敬もされていた祭司は助けなかった。次に通りかかったレビ人（ユダヤ人の中で神殿に仕えてきた一族）も、瀕死の隣人を無視した¹⁸。祭司も、レビ人も、一般の人以上に神への愛が強く、人々へも善の行為を実践する人物であったはずである。それなのに、彼らは同胞を見捨てた。彼らは「神への愛」はあっても、「人への愛」はなかったと考えてよいのであろうか。

ここで、祭司やレビ人の立場に立って考えてみたい。二人とも、道端に倒れていた人が、すでに死んでいると思ったのではなかろうか。ユダヤ教では遺体に触れることは不浄（タメメット）¹⁹とされ、自分の影が死体に落ちただけでも、神殿へ行って清めをしなければならなかった²⁰。『レビ記』の 21 章 11 節では、「自分の父母の遺体であっても、近づいて身を汚してはいけない」と言っているくらいであるから、道端の旅人が死んでいるとしたら、とても遺体には近づけなかったと考えられる。俗っぽい説かもしれないが、勤めを終えて、エリコ²¹という「芳香ある場所（『士師記』1 章 16 節、『申命記』34 章 3 節では棕櫚の町）」を意味する場所へ休息を取りに行く途中であったとしたら、うっかり死体に関係して、再び神殿へ清めをしに戻るのは面倒であったとも考えられる。祭司は、イスラ

エルの人を代表して祭儀を行う、公に認められ尊敬される地位にあり、レビ人も同じく宗教的公務を補佐する役割を担っていた。もしもこの二人が瀕死の旅人を助けたとしても、それは当然の行為であり、「誰が隣人であるか」という律法の専門家の問いの答えとしては当たり前すぎる。

先に見たように、サマリア人はユダヤ人の視点²²からは、祭儀的には不浄であり、社会的には追放者であり、宗教的に蔑まれる異教徒であり、strangerである。このようなサマリア人を登場させたことにより、イエスは「隣人」の解釈を仲間である同胞から、敵をも含むすべての人へと広げたのである。たとえ日頃は自分を差別している相手であっても、助けを必要としている場合、自発的に無償の行為を行うサマリア人の登場は、「隣人を自分のように愛せよ。愛ある行いを実践せよ」という教えとして説得力があり、われわれにホスピタリティ精神をさらに明確に伝えることができるであろう。

荒井献は、「聖書の中の差別と共生 - よきサマリア人の譬によせて」という文章で、次のように述べている²³。

「イエスはこの譬で、ユダヤ人とりわけ困窮にあるユダヤ人は他ならぬ被差別者によって生かされたことを示唆しながら、差別を宗教的に正当化する宗教的エリートを強烈に批判しつつ、聴衆に自ら『隣人』となることにより、差別・被差別の垣根を越える『共生』の道筋を暗示したのではないだろうか」。この「共生」の考え方こそ、ホスピタリティ精神の根底にある思想と思われる。

サマリア人が stranger であるように、この説話を載せた福音書を表したルカ自身もギリシャ人であり、ユダヤ人の社会の中で stranger であった。この譬え話の導入部分である 25 節から 28 節の並行記事は、『マルコによる福音書』12 章 28 節から 34 節、『マタイによる福音書』22 章 34 節から 40 節に見られるが、29 節以降の後半部は『ルカによる福音書』だけの記述である。それは、ルカが stranger であることと無関係ではあるまい。ユダヤ社会において stranger であったからこそ、ルカは、stranger であるサマリア人を取り上げて、真のホスピタリティ精神を記述したように思える。

「ホスピタリティ」は無償の自発的行為であり、相手から何の見返りも求めない。しかし、無償の自発的行為は、自らの心のうちに、「喜びと充実感」という目に見えない大きな見返りが生まれてくる。その意味でホスピタリティは、行為を行う者も受けるものも同等である。語源をラテン語の hospes、さらに背後にギリシャ語の xenos 「歓迎を受ける異邦人」と「よその人を歓迎する行為」というふたつの意味を持つ「ホスピタリティ」と、奴隷

という意味のエトルリア語から派生したservosまたはservusを語源に持つサービス²⁴とはまったく異なるのである。

4．キリスト教精神の具現としての中世ホスピタリティ

次にホスピタリティの具体的な表象が、聖書の中だけではなく、キリスト教世界でどのように扱われてきたかを論じたい。『新約聖書』の譬え話の中で善き隣人として描かれた「善きサマリア人」による見知らぬ人への無償の自発的行為は、キリスト教の精神として受け継がれてきた。ギリシャ・ローマ時代は多神教であったが、4世紀以降キリスト教がヨーロッパで公認されてから、西欧思想・文化に大きな影響を与えてきた。キリスト教は、修道院の発展と深い関係がある。

修道院は、聖アントニウス（Antonius 250?～356?）が、『マタイによる福音書』19章21節の「もしも完全になりたいなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことができる。」というイエスの言葉に感動して、自分の財産を売り払い、エジプトの砂漠で、禁欲、断食、隠遁生活に入ったのが始まりとされている。その後、パコミウス（Pachomius 290?～346?）が組織だった共同生活を制度化し、西方では、イタリアのニラセビウス（Nirasebius 283?～371?）が修道院的な建物を建て、教会の教師に共同生活をさせた。各地に修道院が建てられ、6世紀、聖ベネディクトゥス（Benedictus 480?～547?）は『聖ベネディクトゥスの戒律』²⁵（Regula Sancti Benedicti）と呼ばれる73章からなる修道院の規則を確立した。

これは、『旅をしていたときに宿を貸してくれた人は祝福される人だ』という『マタイによる福音書』第25章35節を踏まえている。その第53章「来客を迎え入れることについて」で次のように述べている。

「修道院を訪ねてくる来客はすべて、キリストとして迎え入れなければなりません。全ての人、そのうちでも特に信仰における兄弟（ガラテア人への手紙6:10）と巡礼者には、彼らにふさわしい敬意を払います。貧しい人と巡礼者に対しては、最大の配慮と気配りを示して彼らを受け入れます。」

修道院は5世紀から7世紀の間に、アイルランド、スコットランド、イングランドにも

広がって行った。

修道院では、神への奉仕の最も重要な仕事は、中世の町に溢れていた貧しい人々を助けることであった。例えば、修道士の仕事の分担には次のようなものがあった²⁶。

Infermarian と呼ばれる修道士は病人の看護にあたった。

Almoner は貧しい人、身体の不自由な人をケアする担当であり、積極的にお粥や豆の食事を貧しい人々に提供し、衣服を与えた。

そして Hospitaller (Guestmaster) は、旅人や巡礼者の世話をを行う修道士たちのことを言った。当時は旅人を泊める宿が少なかったためである。

修道士は道路の整備や寂しい道筋ではガイドの役目さえ行っていた。ホスピタリティ精神あふれる応接は、修道院の評判を高め、天国での栄光が約束されているとも言われていた。

ホスピタリティ精神は騎士団とも関わっている²⁷。十字軍はキリスト教徒であるヨーロッパ諸国が団結して、イスラム教徒から聖地を奪還するために行った遠征である。その折に結成された騎士団はホスピタリティ精神に基づく行動を行った。もちろん異教徒との戦いの中で結成された騎士団であるから、十全足るホスピタリティ精神の顕現とは言えないが、ホスピタリティという言葉と関係の深い用語法とかかわってくるので、ここで少し触れておこう。

十字軍に先立つ 1070 年 (または 1043 年) に聖地巡礼者の世話をすることを目的とした団体がエルサレムの商人により設立された。第 1 回十字軍の遠征時 (1096 年 ~ 99 年) には、ヨハネス騎士団 (Knights of St. John of Jerusalem) としてベネディクト会のゲラルドにより正式に成立し、傷病者加療や巡礼者の病氣看護を目的としたため、ホスピタル騎士団とも呼ばれていた。1113 年にはローマ教皇の承認を得、騎士の加入も認め、傷病者看護を行うだけでなく、異教徒征服の目的も持った。後にテンプル騎士団が成立し、1190 年に成立したドイツ騎士団とともに三大騎士団と呼ばれた。十字軍が遠征した 11 世紀、教会の管理する施設やその他の団体が、遠征軍を無料で宿泊させ、負傷者や病人の看護や戦死者の埋葬を無償で行った。また、聖地巡礼の際の防御や病人や怪我人の看護を目的とした騎士団が各地に設立されたが、この騎士団が弱者をいたわる騎士道のもとになったのではない。ところが騎士団は当初の目的であった奉仕活動ではなく、軍事的なものに変わってしまったため、カトリック教会により解体された²⁸。異教徒征服の目的で結成された十字軍はホスピタリティ精神に反するが、初期の騎士団による見知らぬ人 (stranger) への

無償の行為が、ホスピタリティの精神としてキリスト教と共に、ドイツ語の *gastfreundlichkeit*、スペイン語の *hospitalidad*、フランス語の *hospitalite*、イタリア語の *hospitalita* として現代まで受け継がれている。また、この十字軍時代の宿泊や看護を行ったところから派生した、ホテル、ホスピタル、ホスピスという言葉²⁹も現在使われており、一般にも認知されている。

5 . 終わりに

日本人は必ずしも強い信仰心からではなく、自分自身を見つめ直すため等の目的で、四国の札所巡りへお遍路さんとして行くし、各地の札所巡りも観光気分で行うこともある。しかし、カトリック信者は現代でも、神への信仰心のために巡礼を行う。カトリックの国々では、現在でも巡礼者への無償の好意が続けられている。

ヨーロッパ人に人気の聖サンチャゴへの巡礼、スペインのカミノ・デ・コンポステーラ (Camino de Compostella) ³⁰の例を見てみよう。

サンチャゴ・デ・コンポステーラは、スペイン北西部ガリシア地方の人口 10 万人の町であるが、9 世紀初頭に、キリストの十二使徒の一人、聖ヤコブ (スペイン語ではサンチャゴ) の棺が発見されたことから、エルサレム、ローマのヴァチカンとともに三大聖地となった。このサンチャゴ・デ・コンポステーラへ向かう巡礼道をカミノ・デ・コンポステーラと呼び、出発点はフランスで、フランスの西部からピレネー北部のイバニェタ峠と中央部のソンボルト峠を越えるルートがある。スペインのプエンテ・ラ・レイナで合流して、サンチャゴへ向かう。フランスから始まる 800 キロに及ぶコース、スペイン国内だけでも 400 キロのコースを、巡礼者はレコンキスタの時代でも歩いて巡礼をしていたと言われている。フランスから始まるこの巡礼道とその周辺の巡礼者のための諸施設は、1993 年に世界遺産に登録された。巡礼者は聖ペテロの象徴である帆立貝を首からぶら下げていたが、この巡礼者を道筋の人々は暖かく迎え、中世から近世にかけては、サンチャゴ騎士団が巡礼者を山賊から守っていた。現代でも、オスピターレ (*hospitale*) と呼ばれる人が、無償または低料金や心づけ程度で巡礼者に宿泊所と食糧を提供するアルベルゲ (*Albergue*) で、巡礼者を支援しているし、巡礼中に病気や怪我をした場合は、医師が無料で治療に当たっている。

フランス国内にも有名な巡礼地がある。ピレネー山脈の山麓にある小さな村ルルド³¹である。1858 年、2 月 11 日に、聖母マリアが貧しい水車小屋の 13 歳の少女ベルナデッタのもとに現れた。以後 7 月 16 日まで 18 回にわたって出現されたが、2 月 25 日 9 回目のご出現の時、お告げになられたマッサビエルの洞窟をベルナデッタが掘ると万病に効く泉が湧き出した。現在でも多くの難病に苦しむ人々が、奇跡の水を求めて世界各地から集って来るが、その患者の世話を修道女達が献身的に看護している。

キリスト教に根付いたホスピタリティ精神は、十字軍、修道院の時代を超えて、現代でも受け継がれている例であろう。

ホスピタリティとは何か？日本語の辞書、英語の辞書ではホスピタリティを「もてなし」や「歓迎」の意味に捉えているが、聖書をはじめとしてキリスト教のなかにホスピタリティを見出そうとすると、単なる「もてなし」や「歓迎」を超えた、見知らぬ人への暖かい愛、おもいやり、隣人愛を感じることができる。ホスピタリティとは、「見返りを求めない無償の愛」であろう。

1 『辞林 21』(三省堂、1993)の「旅行者や来訪者を親切に対応する」という解釈は妥当だが、「非定住の宗教家や異邦からやってきた特殊な職業人を神の化身のごとく見なして歓待する習慣。異人歓待。外者歓待」という語釈や、同じく『新明解百科語辞典』(三省堂、1991)の「非定住の宗教家や異郷からやってきた職業人を神の化身のごとく見なして歓待する風習。異人歓待。外者歓待」という語釈には異論を唱えたい。なぜなら、stranger は見知らぬ人、外国の人という意味で、非定住の宗教家、異邦からやってきた特殊な職業人や異人をさすわけではないからである。

これらの辞書における「異人歓待」という語釈は、折口信夫の「まろうど論」を踏まえたものであろう。「まろうど」とは、日本の古語で、「まろうと」、「まらひと」、「まれびと」とも言われ、「客」、「稀に訪れる客」を意味する。来訪者は内部の人間とは異なった異人であり、異人を神と同一視する心性によるものであると民俗学では解釈されている。歓迎される異人は、霊的な存在以外にも、各地を布教して歩く民間宗教家の遊行聖、京都近郊の桂村から村々へ出向いて祈禱を行った桂女、歩き巫女、座頭、各地を渡り歩く芸能者の他、山人、山姥、山童、天狗、鬼、河童、座敷童子などの妖怪も含まれるという。このように見てくると、stranger の訳として、異人とするのには異論があるのである。「異人歓待」ではなく、「未知の人」「見知らぬ人」を歓待するとした方がよいのではなかろうか。

“hospitality”の語源について、マクミラン社の *The Encyclopedia of Religion* (Macmillan, 1987) では「ホスピタリティはラテン語の名詞 hospitium の訳で、この語はさらに hospes に由来しており、hospes は客と主人の両方を意味している。

hospitium は、*A Latin Dictionary* (Oxford, Clarendon Press, 1993) によると、「客を厚遇すること、接待、家」とある。

- 2 古川晴風編著『ギリシャ語辞典』大学書林、1989、p.755
- 3 ポール・カートリッジ『古代ギリシャ人 - 自己と他者の肖像』（箸場弦訳）白水社、2001、p.91
- 4 服部勝人『新概念としてのホスピタリティ・マネジメント』学術選書、1994、p.9
- 5 ホメロス『イリアス』（高津春繁・呉茂一訳）筑摩書房、1961、p.241
- 6 西村善矢「失われた街道集落 - 紀元千年のヴィア・フランチジェナとブルグス - 」地中海学会月報、253 2002.10 p.6
- 7 『聖書思想辞典』三省堂、pp.870-1
- 8 *NAVES Topical Bible* MOODY PRESS. 1874, pp.576-7
- 9 日本聖書教会『聖書』中央出版社、1986、p.767
- 10 新共同訳では良いサマリア人となっているが、善きサマリア人が一般的のため、善きサマリア人を使用する。
- 11 *Manfred Barthel" IN WAS WIRKLICH IN DER BIBEL STEHT"* EconVerlag, Wien-Dusseldorf, 1980
山本七平・小川真一訳『聖書はこう読む（新約）』講談社、1985、p.137
- 12 矢内原忠雄『聖書講義 ルカ伝 上』岩波書店、1978、p.339
- 13 『旧約・新約聖書大辞典』教文社、1995、p.515
J.K.コリンズ『サマリア人とユダヤ人』（渡辺省三・土岐健治訳）教文館、1980、pp.19-25
- 14 三浦朱門・曾野綾子・河谷龍彦『聖書の土地と人びと』新潮社、1996、pp.219-220
- 15 ローマ帝国で都市名として用いられていたラテン語都市名は Oxford, *A latin English Dictionary* によると Augusta Taurinorum（現在の Torino）、Augusta Praetoria（現在の Aosta）、Augusta Vurdelicorum（現在の Augusburg）、Auguta Emerida（現在の Merida）等である。
- 16 荒井献・川島貞雄・川村輝典・中村和夫・橋本滋男・松永晋一『総説新約聖書』日本基督教団出版局、1989、p.31
J.K.コリンズ『サマリア人とユダヤ人』（渡辺省三・土岐健治訳）教文館、1980、pp.212-3
- 17 嶺重淑「慈悲深いサマリア人の譬え」- ルカ編集の視点 - p.47
Jeremias, *Die Gleichnisse Jesu*, p.171
- 18 日本基督協議会『キリスト教大辞典 改訂新版』教文館、1963.
- 19 滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版、1993、p.216
- 20 三浦朱門・曾野綾子・河谷龍彦『聖書の土地と人びと』新潮社、1996、pp.219-220
- 21 日本基督協議会『キリスト教大辞典 改訂新版』教文館、1963.
- 22 James L. Mays "Harper's Bible Commentary" The Society of Biblical Literature, 1988 荒井喜三、並木公一、橋本滋男、松永南久夫。山本一郎、和田幹男『ハーバー聖書注解』教文館、1988、p.1074
- 23 荒井献『荒井献著作集 3』岩波書店、2001、p.325
- 24 服部勝人『新概念としてのホスピタリティ・マネジメント』学術選書、1994、p.67

- 25 古田暁『聖ベネディクトの戒律』 すえもりブックス, 2000、p.212-5
- 26 *R. J. Unsted" Monasteries"* A. & C. Black. Ltd. 1970, pp.20-24. p.59
Abbot, Prior, Subprior の下に教会の建物と聖杯の担当者、音楽と書籍の担当者、食料、飲料の担当者、料理担当、食堂係、特別料理の担当者、衣服と寝具の担当、見習、新参者の訓練係などとともに病人、貧困者、旅人の世話をする係りがあった。
- 27 志子田光雄・富壽子『イギリスの修道院』研究社、2002、p.12
- 28 服部勝人『ホスピタリティ・マネジメント - ポスト・サービス社会の経営 』丸善ライブラリー、1966 p.9-10
- 29 ラテン語の hospes は、hospitor (泊まる)、hospitus (知らない、未知の客を厚遇する)、hospita (見知らぬ女、賓客、女客)などの派生語を生み、hospitium (客を厚遇すること)は、ラテン語 hospitium (小旅館)と古フランス語 hospice に派生して、この hospice が 19 世紀に英語になり、現代では末期患者の心身の苦痛を軽減する施設であるホスピスという言葉として使われている。ラテン語の形容詞 hospitalis (歓待する、手厚い、客を厚遇する)は、14 世紀にフランス語の hospital (宿泊所、接待所)となり、16 世紀より病院という意味で使われるようになった。また古フランス語の hostel になり、13 世紀には英語の hostel に、17 世紀には現在のホテルの意味として使われるようになった。ホテルも病院も自由意志により現れた相手を厚遇するという意味で、同じルーツを持つ。
- 30 <http://www.santiago-compostela.net/ja-cf32html>
香川眞『現代観光研究』嵯峨野書院、1996、p.55 ヤコブの遺体が発見されたときは、モロッコ軍がスペインに侵攻した 100 年後であった。ローマ法王レオ 3 世が聖地とする声明を出し、門前町が出来、サンチャゴ・デ・コンポステーラと呼ばれた。
- 31 ユイスマンズは『ルルドの群集』(1906)田辺保訳、図書刊行会、1994 の中でルルドの俗悪な観光化を嘆いているが、修道女の献身的な看護はホスピタリティであると考えられる。